

伴郎岐葉陰馬譜

初編

四





嚴島扁額縮本初編卷之四

目錄

御管絃船之圖

御供船之圖

御島巡之圖

俵藤太射蛇之圖

孔雀緋鸚哥之圖

三十六歌僊之圖



波小朝日之圖
 遊行上人之歌
 和歌三神之圖
 菊慈童之圖
 韓信出市人之袴下之圖
 阿蘭陀舶入津之圖
 扇面形三十六歌仙之圖
 初編卷之四目錄終

嚴島扁額縮本初編卷之四

藝陽 千歳園藤彦著

○御管絃船之圖

堅三尺 横五尺余

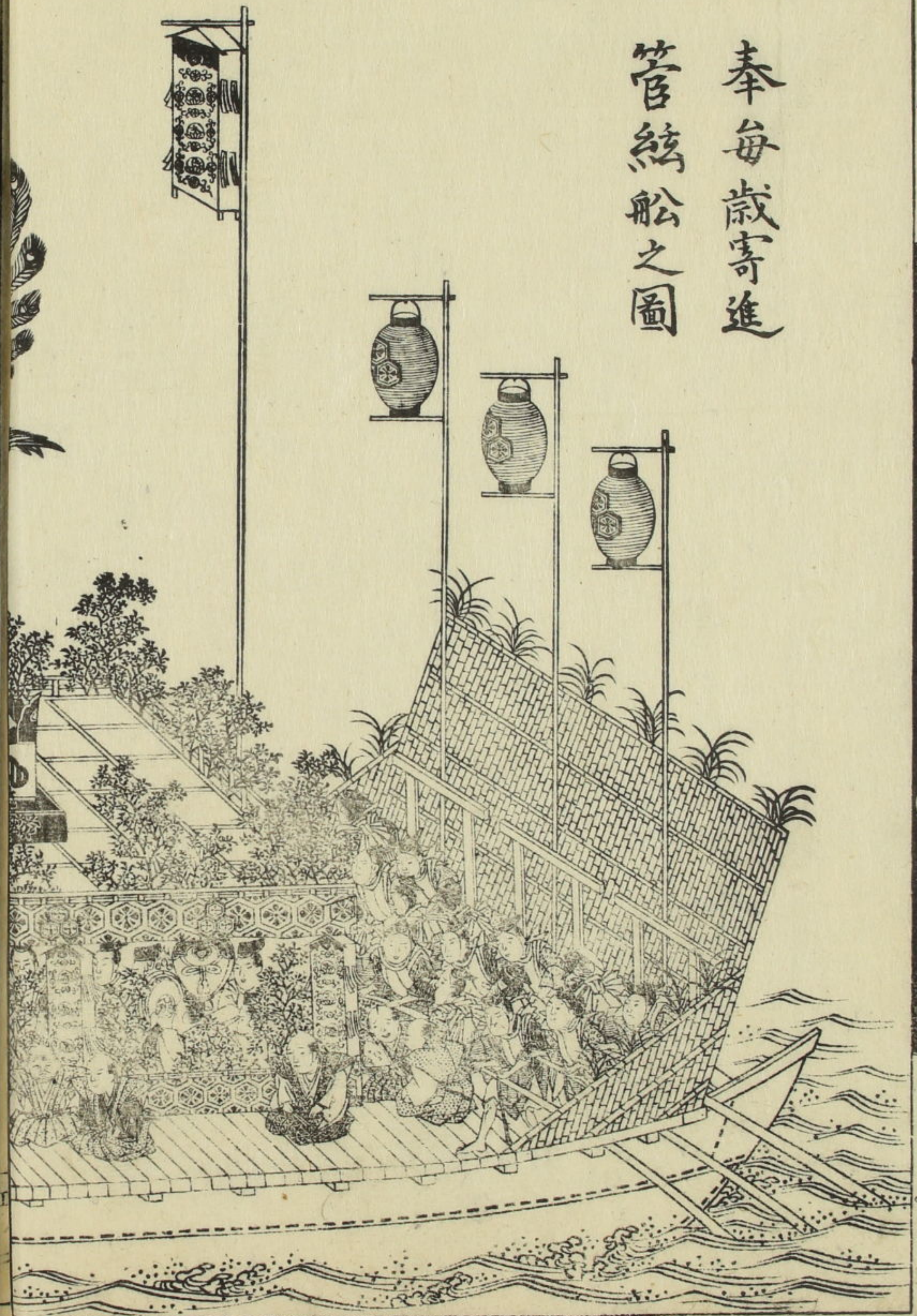
廻廊本社より中央に掲

延享二乙丑六月十七日筆者不知

當社道芝の記云毎年六月十七日御船組大官棚守は社家中雜
 餉あり今日神前御池より船管絃の御船を組あり舸三艘を舸
 て座を張り一はぎきを結び竹はく樓を造り品々のはく花燈籠
 をはくあり前後大釣灯りす飭十七日御船を濫申の刻御船を大
 鳥居の正面より乗るは社家北のく供僧六人裝束をあらはし水主
 十四人素襖袴烏帽子はく行儀尤嚴重あり大宮大鳥居正面に
 管絃を奏せたり外官地御前ふけわり鳥居のくちへ御船を入西

廻廊本社ヨリ東中央三掲 堅三尺 横五尺余

奉每歳寄進
管絃船之圖



延享二乙丑六月十七日



願主

新田屋
新六

の刻より管絃よりは乱聲其外樂より供僧伽陀をひく其
後御船嚴島へも渡り中より樂を奏せしを途中の音樂と云
あらざり御船より長濱の鳥居の沖より樂を奏し供僧
伽陀をひく其後樂より大鳥居の沖より漕入亥の刻
より中畧御船廻廊の舌先より樂を奏せり御船を三返ま
り宮の正面より樂を奏せり太平樂を奏せり御船を三返ま
り御池をめぐり大元宮へ漕ぎ樂を奏し伽陀をひくやま
大元鳥居の御前より樂を奏し長濱の寺一 夜半にりを
大元宮に於て社家供僧役人雜餉云々

因ふに船管絃の初時代を宗祇の名所方角ふれを凡四百年
の余と考られり又右三艘の御船古より嚴島豪家のより進獻

一来り然るにこのころより御船は調毎年三艘安藝郡
倉橋島濱田屋何某より寄進たれり但しこの圖に延享二とあれ
ばあれはこの繪馬の年次と見えて濱田屋記録に寶永前にも其證おは

○御供船之圖 堅二尺余 横二尺五寸 本社西廻廊に掲

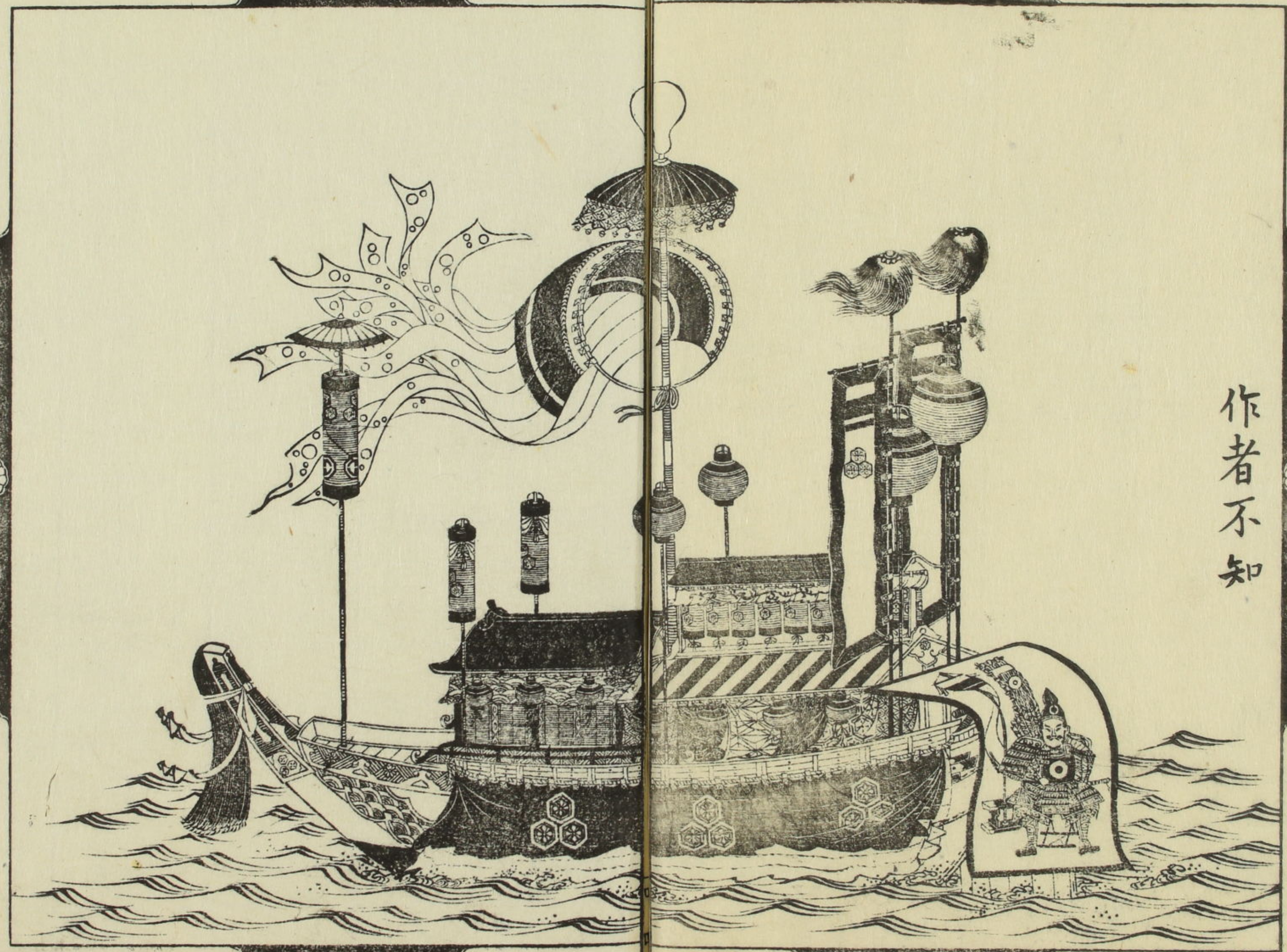
年号月日圖中に見えど畫工不詳 但御供船百餘艘扁額の内
今一舟一艘の圖をひく

御供船嚴島大明神毎年六月十七日夜御本社より外宮地御前
へ渡御還御の節海上御供の爲に廣島大小の町々並藝備郡
郷より調進の船をひく其船は花麗を盡し飾立幔幕切
幕旗幡幟綾羅錦繡金銀糸箔の縫文善盡し美盡し高釣燈
花灯燈船中に釣餘一槓人水主の装束に至るまで種々はまぐ仕

西廻廊二掲

横二尺余
竖二尺余

作者不知



さて十六日の晝府下の川口船揃一同夜の潮の満ふをひ苗太鼓鉦
鼓鞀鼓琴瑟三弦胡弓あひもの音どもを鳴らうた々雅樂俗樂船毎
に謠舞の河口を漕ひし翌日十七日朝嚴島長濱に著り船揃して
おのト夕外宮へ渡御の御供まじり同夜半還御ふまをひすく長濱ふ
あふくこのとき本社より外宮まじり一里余の海上ふ御船神燈のまじり
畏あり百余艘の供奉船ふ挑はれり獻燈のひり或遠近参詣の客
船おのがさるべく奉れり清光海ふ映ト天ふ耀きひり照まらありさる
蒼海宛も曠野ふ花種をまきたるごとくはく目を驚まはりあり
くは天祭の壯觀すたをひあふべりもまをれはく御供ぶねを
同夜御神事滞ふきを祝奉り十八日の朝一ふはれ各府下の川
み者船一と萬歳を唱うてまらるごとくはく

因云御供船の中み御用船とていづれも釣灯の布りあどにその志ありされり
渡御のやうとれく御調度の御用相はむら塩屋町とふを其第一の船とて是
御供船のはあれをくのぼり釣灯ふ元祖とて御供の一列と

○御島廻之圖

堅三尺余
横五尺余

本社廻廊西の中央に掲

享保二十一丙辰奉三月吉日廣島京橋何某畫

此圖の御島廻の第五の擗所養父崎大明神より五島ふ御島喰
飯奉る圖なり

そとく御島廻りまはるはかどくも三柱のまがみこの志あり
降臨まして鎮座の地をみまらうんと沖々を吹かからやゆ縁の
もとより願主吉辰を撰ひ宿の主ふちぎりかひてより清火して

本社廻廊西之中央

横 五尺余
竖 三尺余

御島廻



享保元一丙辰年三月十五日

菅原田屋
甚右衛門

島崎京橋

當日の未明ふたつともふ潮は後禊し神前御笠の濱鳥居の洲より船あつ御師の船も四手よりかけ神木并て先に進む願主は真柁をぬり船もきあひ奇麗にせり水主十二人聲をそろへ櫓拍子より洲崎の松のえども榮をど誦ひてど漕ぎしるまきけのなみく宿のあど己下りのりほれもたれど漕ぎしるまきけのなみく宿のあど己下りのりほれより威儀もむろふくやくく目ぐろぐの罪もふくたぐ偈仰乃あみぶとんぐくみやす右のこにあくまんとる云

○御島廻七浦の次第

- 杉浦大明神 第一 ○鷹巣浦大明神 第二 ○腰細浦大明神 第三
- 青苔浦大明神 第四 ○養父崎浦大明神 第五 ○山白浦

大明神 第六 ○洲屋浦大明神 第七 ○御床浦大明神 七所の外の拜所

其外ふ包浦大明神やこの護王の神社等数々まきやれされを拜そとら御島廻りといふあり

因云御島喰飯とまゆをとい御島廻りの時養父崎大明神の前海上めて供御を備ふ弥山の峯より神鴉一雙飛来て供御を捧るを申へ其五鳥とまゆとい往古より一雙羊々相續せり三月の末より雌鳥巢をくり子鳥一雙を生故四月五月ハ雌鳥出うやと少く雄鳥もろく出うやと多し相續の子を養育して六月の末七月にひらりて子鳥をいさむい養父崎の御社まぐいで鳥喰飯をよとて候まふをとり八月九月の頃親子二とはいどもに出て御島喰飯を上るうて毎羊九月廿八日嚴島の向ひ地大野村ふる大頭明神に御祭の供御奉るとき同社神前より半丁余隔く御田の中より五鳥も鳥喰飯を供ふ此時



文化元年壬申季夏 客人社内陣外不掲

横九尺 竖六尺

金地彩色

平安
素絢

親鳥のまゝ親鳥の雌雄のまゝなりて供御をうへこの供御より
より親鳥の行方なれど子鳥一雙相續して翌日より御島廻り子鳥
一雙出づる神祕微妙中々筆におぼも恐ろし嚴島の御山より大野
まで一里余の海上を隔ててに必りに飛来す親鳥名残の供御を上
其まゝに行方なれどありゆゑと奇瑤まのありに拜と奉るとまをま
も中々ちろく五鳥劍羊の相續うくのぞ
已上御島廻りの事より
とくく道芝記の意

○俵藤太射蛇之圖

堅六尺 横九尺

客人社内陣の外正面脇掲

文化元年壬申季夏素絢畫 素絢字伯陵山齋と号俗稱
山口武次郎京師の人

傳云秀郷と姓藤原房前公より六代村雄郷の子と和州
田原とふ地り産り俗をよむ氏と後不轉して俵の字にあらむ
朱雀院の朝ふ平将門を誅伐して軍功ありゆゑ鎮守府の將
軍に任ぜらるるこれを前延喜八年勢田の湖中小龍ありゆゑ
三上山の巨蜈蚣の為に惱まると一日秀郷勢田の橋をまゝるに龍ふ
しり怖めて其うへを跳とえ龍を其勇氣を感して忽然と人
に變化し其の愁とをるを物ごとりらるとして彼むごしを殺ん
とを請秀郷許諾て百足のつづを候いこれに射ふ一二の矢
とをとりもとりてたむ第三の矢不唾をありこれを射てはは殺
まるとえり龍神大まはるとんて秀郷を龍宮へ誘引あつ
思を謝はまるとら十種の寶器を遺る太刀鎧旗幕卷絹
鍋俵庖刀鐘心得の童子一人秀郷これとえて還りそのら鐘

三井寺ふ釣太刀を 遷来矢 赤堀家の重寶と其俵の末
 巻絹をともじりてもちいしはくるとかゝのちれいと誤てなるとの
 底をくたへしをちひさき蛇いごきてくたへし米をそとせし

○孔雀緋鸚哥之圖

堅八尺 横五尺

客人社正面小掲

安永七年戊戌五月吉日宋紫石筆 宋紫石字君赫雪溪と号
 江戸の人畫法清人宋紫岩に學子なり宋紫を冒し

孔雀の本綱いよく交趾廣州の南方の諸山にやち高山喬木の
 下ふ生じ 中畧 晨ふと鳴聲相和その名都護とふ雌を尾
 短して金翠を雄の三年にて尾あふちいよく五年ふして長じ
 ること二三尺復に毛を脱春あふりてやち生じ背より尾に五寸ぐ

客人社正面小掲 堅八尺 横五尺 宋紫岩



奉掛

安永七年戊戌五月吉日

年六十三 宋紫岩寫

京都日本橋通三番 唐木屋茂兵衛

圓き文のり五綵の金翠相繞て錢の如甚其尾を愛む山棲はるに必先尾をおく
 處を擇み雨降るとき尾重て高く飛とる人依て往てこれ捕中畧又云
 孔雀雌雄のりといふも將小乳人といふ時木に登て哀鳴以蛇至れば即交む
 故小其血膽をほ人を傷禽經ふ所謂孔雀蛇を見るとき宛て躍
 といふ是尾小母あり若目に入れ人をく昏昏やむ云 本草綱目 環用
 鸚哥本綱のりも鸚鵡の嬰兒の母の語を學ぶ如故小字嬰母小のり
 まゝも鸚哥よれ類 數種有り丹味釣の吻長き尾赤き足金の睛深目上
 下目臉皆能眨動古嬰兒の如其距前後各二の衆鳥異其姓寒を畏る
 即發顫瘡の如にて死に飼に餘甘子を以解レ或云これ背を摩る時瘡
 或云雄の喙丹を變レ雌の喙黒七變レ總て大なるを鸚鵡小を鸚
 哥大のり種々のり白のり五色のり紅のり白 大なる鳥のり紫赤色其
ちいさきを俗に紺のりといふ

○三十六歌僊之圖 豎二尺余 横一尺余

客人社組入左右に掲

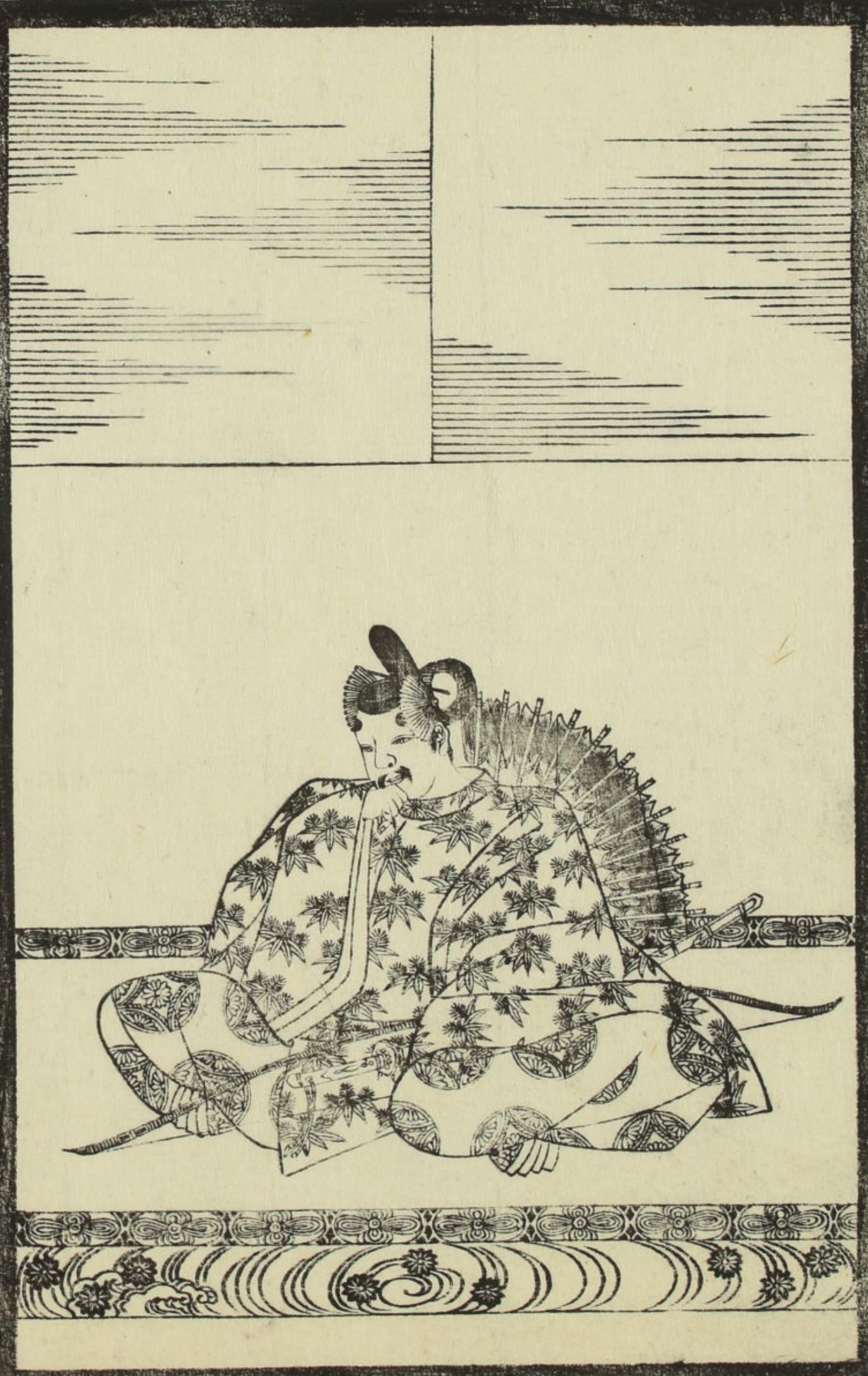
年号願主等裏書寫のり土佐光信畫のり書實隆公御真筆あり
 實隆公の西三条内大臣正二位逍遙院と号法名堯空と稱レ

○土佐光信の藤原廣周の子土佐守經隆累代土佐をりつて任官レ
 故不俗ふれを氏と代々畫所預とある善和様を畫く凡古来和繪
 小名もの數輩今光信古法を兼合レ一家を立レ細筆レ
 色々彩色金碧を内筆力あり外芳艷おレ諸家の
 畫工その格をも

因此繪馬三十六枚のりを出凡圖中に年号願主等これあり
 とり書畫も本文より明あり依て裏書の儘を画圖の片

右
 在原業平
 在六中
 美竹
 梅乃

西三條實隆御筆



永平七曆
 孔主
 道本

供平右筆
 光作画之

客人社組入左右に掲

横一尺余
縦二尺余



これより三巻ふいふほど一圖を臨寫して御書風を傳ふの事



の
案
府
事
産
司
あ
り

脇ふらそへ又宮島舊家の筆記も詳々といふ事なき故畧焉

○在原業平三代實録元慶四年五月廿八日業平卒去の条に

天長三年阿保親王表をてゆふにゆりて姓を在原朝臣をてゆりて

りり業平の行平の別腹の弟あり母は伊豆内親王父は平城天皇の皇

子阿保親王あり

○源重之帶刀より陸奥の任よりゆりて國みく身まより一より

家集大系圖拾芥抄等にもあはれりて又清和天皇白守

貞元親王御子兼信あり伯父兼忠の養子とあり

○波ふ朝日之圖

凡一尺 四方

本社組入西側ふ掲

この名馬よも人のいふことありと備前のとたりいふことあり流れて

まのに數里の海上をこりりて大鳥居のうらふ入舌先あり

神通不思議ふもさるり信者の奇特を感ざるにあたり

何れも直ふ今の所ふ掲らるる

但

因ふ和漢三才圖會ふに波は浪へ海中の大波を濤といふと潮頭と

いふ釈名ふ風水にあはれ文をたれこれを連瀟といふ泊湘の淡水の貌あり

○日天照皇大神 日德女神 金鳥も陽鳥もいふ

○遊行上人之歌

堅一尺余 横三尺

本社内陣の上に掲

上人代々巡國のまきりあはれ當社へ詣てりて兩社内陣ふあ

て勤行等これありて嚴重あると古例より奉幣神酒頂

海中に旅する神を
めてしる事ありきまふ
名をと揚する
満げり

月をのせしめし海根より

享保辛寅年十月廿日

越前守を拜書

ゆゑに夢裏ふ七言四句の偈を授りし〇六字名号一遍法十界
依正一遍躰萬行離念一遍證人中上々妙好花夢はめて其偈
を書りしふ當ふ上の字六十萬人とんる人弟子を他阿彌陀
佛とふ言撰州兵庫觀音堂ふむる正應二年八月廿三
歳五十一

○和歌三神之圖

堅五尺
横六尺余

廻廊御作事所の前掲

年月日圖中に見えし吳俊明畫 俊明五十嵐氏省て五を吳
とふ吳俊明とふ字方徳孤峯穆翁の号あり 越後の人畫法一
家をたけ安永中ふ没り

三神とふふ

廻廊御作事所の前掲

堅五尺
横六尺余

佐藤俊明存林画
时年七十



○柿本人麻呂 石州高 玉津島神 紀州海部郡 山部赤人

○人麻呂のこや前子出せり

○玉津島明神を衣通姫之允恭天皇の后宮忍坂の太中姫の妹より聖武天皇神龜元年玉津島明神と紀州小現ト云ふれ古より伝ふる又一説小玉津島の神を衣通姫より傳ふるも此の傳ふる本居翁の玉勝間みえられに贅せり

○山部赤人の顯宗天皇元年に来自部小楯より人山部連姓を賜ふに云ふれ其裔かへは主れと正史み所見れを今よりて何れの頃の人と云れ終るも万葉集の歌を考れ元正聖武の御代の人ありこれより先哲の説あれば煩く詳悉せん

○菊慈童の圖 取五尺 横二尺餘 客入社内陣正面脇み掲

藍江畫 年号月日圖中み見えど

菊慈童の故事世に傳ふ所多しと云ふもその荒まりをへる 往古より周穆王のとき寵愛の侍童あり名を慈童とよまれたり或るとき慈童はやまりて帝の枕を踏みえたるを大臣已下詮議する其科かゝるべとて都より三百里の外郡縣よりなる深山へ流さるべきを定めりしは穆王不便ありやれんも助むに道ありては慈童を召され往年釈尊より穆王へ親授せられし法華經の四要品のうち深秘の文句のうちより普門品ありしもの具一切功德福壽海無量の二句の偈を授けり慈童は深山幽谷の底みえられ常みよの二句の文を唱え虎狼惡獸をちづくべしと云ふをふり忘れやせんと側ある菊の葉あり

観山



廻廊御作事所の前上掲

横三尺 竪五尺

絹地彩色

藍江



客人社内陣、外正面脇三掲

横二尺余 竪五尺
まゆち
まゆち

この文を書付たりそねりこの菊の露とらふはまをりるを慈童
まをひく飲み味甘露のまはく更不飢渴をらむとまのまを天
人自来アそ舞をくらえ鬼神と手をはひく仕へる故配流のほま
もまをりたりりて福壽をらのまに羊積り遂り通力自在の仙
人とありたりりりて梁武帝の代ありり八百羊余を經れれも
ふ原美少年の姿あり魏文帝の時ふ名を彭祖と改て出ま
り帝はこの仙術をまげんけふと
古今
諸録 撮要

古今
のんちん山ぬのまのまにりちとちをまねれりまむ
素性

○韓信出市人の袴下之圖 堅五尺 横三尺 迴廊御作事所の前掲

羊号月日圖中み見えり觀山畫通稱松本觀山浪華の人

史記淮陰侯列傳み淮陰屠中の少年韓信を侮ものありて云
若長大好で刀劍を佩し中情怯の衆を辱てふ
信よく死を我を刺せ死をまことあてふ我袴下みでと是
にあり信これを執視し俛をり袴下み出く匍匐を市
人皆信を笑ひもの怯し其後漢高祖み入る大將軍と
あり敵をちるばり大功をてて楚王み封せられりりらまこ
淮陰侯とぬる若きまより大功の細瑾を願ふもの大志あり
しとらそれと天下のひと驚るるとど 撮要

○阿蘭陀舶入津之圖 堅五尺 横六尺 西迴廊中央小掲

大宮西廻廊中央二掲

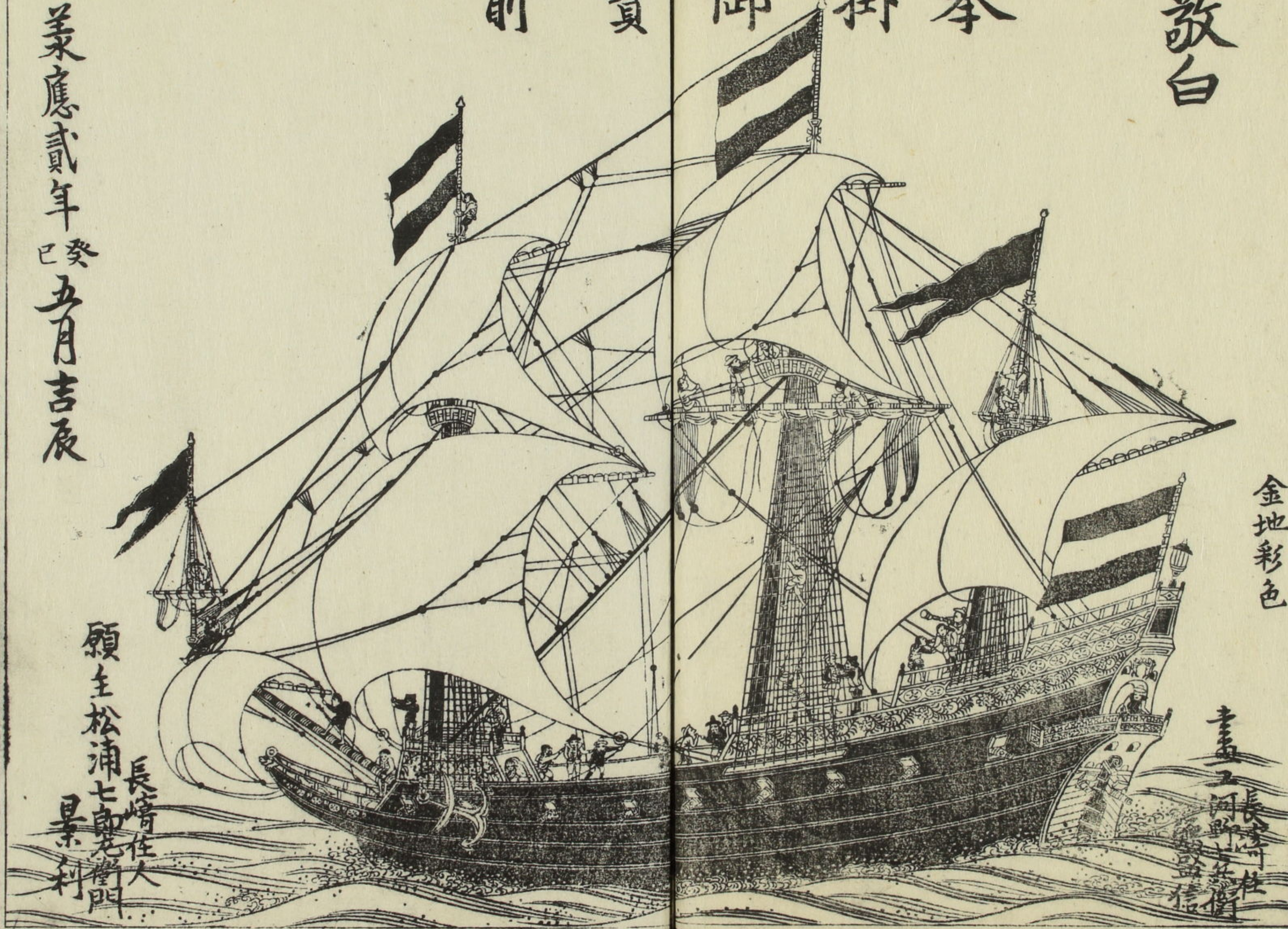
横六尺
竖五尺

敬白

奉掛御寶前

景應貳年
巳癸五月吉辰

金地彩色



願主松浦七郎左衛門
景利

長崎任人

書五河野上信

承應二癸巳五月吉辰長崎河野七兵衛源盛信畫畫系不知
阿蘭陀の商船を世界中の... 乘り巡り萬國乃
奇品珍物を相互に交易して其國用を通じその船の大なる制
作の巧美觀陀國... 八重帆にして大洋を航りまを
るに風の順逆を... 崑崙子として人ありて猿のは
... 檣の... 帆を自在に慶長二丁
酉歲肥前平戸... を最初としそのち寛永十八辛巳年
長崎の港... 商館を賜... 交易を申... されり
今... 年々交代して来泊す

因に阿蘭陀より日本まで海上二万二千九百里と云ふ國王を古年
波爾亞と云ふ所の國人色白く毛髮赤く鼻高く眼圓く... 星あり
常々一脚を提て尿を去る... 犬も作らる... 種々の肉を... 肉
箸をもちひど常に麩餅を... 是を波年と云ふまんぢの館を... の
如く寄陽出島に客居に其長を加比丹と云ふ又崑崙子と云ふ... らん
が... 國の... 西南の海上あり中畧野人の身の色黒き... の
... 俗に黒坊と云ふ身... ちやけり... 帆... の... を...
咬啣吧... せん... せん...

○扇面形三十六歌儂之圖 堅二尺三寸 横三尺 本社組入北向に掲
寛永二乙酉年九月吉祥日揚心筆 揚心畫系未考
三十六歌仙... 後一条院の御宇四條大納言公任卿のえらひ
み... 後み覺盛法師左右を... せん...

左 柿本人麻呂出所前みふ

右 紀貫之の御書所預木工頭土佐守玄蕃頭等に任じ從五位下望行の子

左 凡河内躬恒凡河内の古事記云天津日子根命凡河内國造等の祖あり姓氏録凡河内忌寸天津彦根命の後く躬恒の前甲斐少目又淡路掾又御厨子所預あり又祖の志れど

右 伊勢ハ從五位上大和守藤原繼蔭之女少く又伊勢守あり一書み宮は入きてとのをび名く三代實録仁和二年從五位下藤原朝臣繼蔭伊勢守とあり云下畧

左 中納言家持從三位又從二位大納言大伴宿禰旅人卿之右 山部赤人の中くみ出

左 在原業平前み出
右 僧正遍昭前み出

左 素性法師ハ雲林院の別當弘延く俗名左近將監良岑玄利と云遍昭在俗の時の子あり扶桑畧記より大和物語ハ法師の子ハ法師ありと云きとて法師ありと有り

右 紀友則ハ姓氏録ハ紀朝臣建内宿禰男紀角宿禰の後ハ友則ハ大内記ハ或ハ宮内少輔在友の子と云

左 猿麻呂大夫猿丸ハいふ人もあれどこの名古今集の序ハ猿丸の云或説ハ弓削道鏡勅勘をりりて名を改ると云ハハ道鏡ハ光仁天皇寶龜三年配所下野國藥師寺少く死り○や山ふみなら乃歌ハ光孝天皇の皇子惟貞親王家の歌合のくく時代と云



九
 月
 廿
 二
 日
 宣
 旨

大宮組入北向掲
 櫛寸法畫圖共如此

金地極彩色

頭
 巾





忘説まわしごとて大夫たうふ五位ごゐ已上いじやうの美稱みしやう

右 小野おの小町こまち前まへに出い出でる

左 中納言ちゆうなごん兼かみ輔すけの從したが三位さんゐ右衛門えもん督とく堤つゐ中納言ちゆうなごんとて又また左ひだり中將ちゆうしやう利基りき卿きやうあり

右 中納言ちゆうなごん朝忠あそちゆうの土御門つちのみかど中納言ちゆうなごんとも堤つゐ中納言ちゆうなごんとも今昔物語いませきものがたりの三條さんじやう中納言ちゆうなごんとも又また三條さんじやう右大臣みぎのちじん定方じやうかた公母こうぼの中納言ちゆうなごん山蔭やまかげ卿きやうの女むすめ

左 權ごん中納言ちゆうなごん敦忠あつちゆうの從したが三位さんゐ土御門つちのみかど中納言ちゆうなごんとも枇杷びわ中納言ちゆうなごんとも本院ほんいん中納言ちゆうなごんとも中畧ちゆうりやく實じつの大納言だいなごん國經くにのり卿きやう左大臣ひだりのちじん時平ときへい公こうの繼父けいふあり母君ははきみ在原はら棟梁むねむねの女むすめ

右 藤原ふじわら高光こうこうの村上帝むらのかみのころのひと藤原ふじわら師輔しすけの八男やちなん康和かうわ元年げんねん遜世そんせいあり

左 源公忠げんこうちゆう朝臣あそぢ光孝こうこう天皇てんかう皇子こうし大藏だいざう卿きやう國紀くにのり男おとこ之任のにん右大辨みぎのだいへん号ごう濠井わゐ辨へん

右 壬生にぎひ忠岑ちゆうしんの姓氏せんし録りよく壬生にぎひの臣おみ孝照かうしやう天皇てんかう皇子こうし天帶あまのた彦ひこ國押くにおし人命じんめいの後のちあり壬生にぎひの宗神むねかみ天白あましろののちあり云々いんいんこの西氏さいしのうちあり云々いんいん中畧ちゆうりやく躬恒みよとこ集あつふは云々いんいんかろく中畧ちゆうりやく忠岑ちゆうしんの右衛門えもん府生ふらうの父ちち木工きく允忠いんちゆう衛ゑとあり

左 齋宮さいみやう女御によみの重明しゆうめい親王しんおうの女むすめ微子ゑしと兼かみ承平じやうへい六年ろくねん齋宮さいみやうあり云々いんいん後村ごむら上帝かみの女御によみあり

右 大中臣おほなかつぢ賴基らいき朝臣あそぢ大中臣おほなかつぢと文武ぶんぶ天皇てんかう御代ごだいの神事かみこと供たぐとももの本姓ほんせいと云々いんいん勅ちゆうありて藤原ふじわら意美いみ麻呂まろ公こう中臣なかつぢの女むすめあり云々いんいん清麻呂きよまろ公こうに云々いんいん稱なづ徳とく天皇てんかう神護かみご景雲けいうん二年にねん大おほの字なづを云々いんいんありて

大中臣と云ふ其後嫡流を大中臣庶流を中臣と分てり頼基の祭主
四位神祇大副

左 藤原敏行の姓氏録に津速鹿命三世の孫天津兒屋根命より

出之中畧天智八年藤原氏より敏行朝臣に從四位下右近
衛少將大内記あり父に按察使富士麻呂母に紀名虎女あり

右 源重行の前出

左 源宗于朝臣源の皇別の源氏と云ふあれども是の嵯峨清和宇多

村上等の源氏より宗于朝臣に右京大夫正四位上へ父に光孝天皇
皇子一品式部卿是忠親王

右 源信明朝臣に三條右大臣公忠の子村上天皇康保二年十月十八

日卒

左 藤原清正の中納言魚輔の男左少辨五位

右 源順に左馬允舉の男春宮藏人能登守五位差家源氏

左 藤原興風に相摸守從五位下を奉議瀆成の孫めて道成の子に

右 清原元輔清原の姓氏録に清原真人敏達天皇の孫百濟王の後と

あり異より天武天皇白王子舎人親王の後胤に三代實録に貞觀
元年秋岡王に姓清原真人と賜へ元輔に肥後守河内掾父の

下野守顯忠あり

左 坂上是則坂上に三代實録に貞觀四年六月に坂上伊美吉能支

云等九人姓坂上宿禰と云ふ是則に大内記に父祖を或
いは好蔭の子と云ふ

右 藤原元真甲斐守 清國三男康保三年正月廿七日從五位下 丹波介小任

